# 第 17 章　智恵(はんにゃ)の完成（般若波羅蜜）p233～

Chapter 17　The Perfection of Wisdom Awareness


第 11 章　六波羅蜜の設定　　Training in Action Bodhicitta
第 12 章　施しの波羅蜜（布施）The Perfection of Generosity
第 13 章　戒の波羅蜜　（戒　）The Perfection of Moral Ethics
第 14 章　忍の波羅蜜　（忍辱）The Perfection of Patience
第 15 章　精進の波羅蜜（精進）The Perfection of Perseverance
第 16 章　静慮の波羅蜜（禅定）The Perfection of Meditative Concentration
第 17 章　智恵(はんにゃ)の完成　（智恵(はんにゃ)）The Perfection of Wisdom Awareness


これまで第 16 章まで進みました。
今回から第 17 章です。

Wisdom　名　賢いこと、賢明、知恵、分別

Awareness　名　気づいていること、知ること、自覚、意識

(本文)p233-2 行目～8 行目

（Ｖ２２８）
**般若の波羅蜜**
般若の波羅蜜（智恵(はんにゃ)の完成）について、
摂義は、「過失・功徳の二種類を思惟することと、
〔自〕体と
区別と、
区別個々の自相（定義）と、
知るべきことと
数習すべきことと
果と
〔―これら〕七つの義により、智恵(はんにゃ)の波羅蜜は包摂されている。」というのです。

今回は、第 17 章　般若波羅蜜のうち、過失・功徳の二種類を思惟することについて勉強していきます。

般若…≪梵 prajna の音写。慧、智慧などと訳する≫
　① 一切の事物、道理を明らかに捉える、悟りの智慧。また涅槃に備わる三徳の一つ。

**波羅蜜…≪梵　paramita の音写。波羅蜜多とも。到彼岸度などと訳する≫**

**迷いの此岸から悟りの彼岸に渡る意味で、ふつう仏になるために菩薩が行う修行のこと。**

数習（さくしゅう）…しばしば習慣として繰り返すこと。しばしば習慣として習い修めること。

**般若波羅蜜…≪梵　prajna-para-mita の音写≫**

**六波羅蜜・十波羅蜜の一つ。涅槃の彼岸にいたるために、菩薩が修行する六種もしくは十種の行のうちの一つ。真理を認識する悟りの智慧。智慧波羅蜜ともいう。**

…例文仏教語大辞典　石田瑞麿著より

般若波羅蜜について…2005 年 ASUMI 般若心経について、野田先生の講演録より一部抜粋。

第 11 章で中村さんが紹介しておりました。恐縮ですが、渡邉が文字お越ししました。誤字と多少の聞き違いがあるかもしれません。参考まで。

（前略）

**プラジュニャーパーラミッターという言葉の翻訳です。**

プラジュニャー、というのは、プラーとジュニャーから出来ている言葉で、ジュニャーというのは「知る」。英語で「know」という言葉と語源が一緒なんです。サンスクリットという言語はインド・ヨーロッパ族原語で、英語、ドイツ語、フランス語とご先祖様一緒なんですね。だから、共通の単語のなまったやつが両方に残っているんだけど、

ジュニャーっていうのは、know＝「知る」ということ。

プラーというのは、「初めから」とか、「前に」とか、「全体の」とか、接頭語なので、

**プラジュニャーというのは、「初めから知っていること」。**あとから知ったことじゃないんですよ。

**あとから知ったことをサンスクリット語ではリカルパ。**

**普通、「分別」と訳されているのね。僕らの持っている知識は全部分別です。**

だって、生まれて何も知らないときに、犬がいるじゃないですか。「わんわん」ってお母さんがいうから、「わんわん、わんわん、あれ、わんわんだ」っていうじゃない。次、猫見ても「あれ、わんわんだ」っていうじゃないですか。お母さんが「あれはわんわんじゃない。にゃーにゃーよ」っていうと「にゃーにゃー」っていうじゃない。子どもを外へ連れてったら、たまたま牛さんが動物園で、牛見て「ワンワン」っていうじゃない。お母さん「わんわんじゃない、にゃーにゃー違う。あれはモウモウよ」って言うじゃない。そうやって、物事を分別していくのね。その分別をずぅーっと重ねて大人になったので、僕らの知っている知識はすべて分別知なんです。分別による知識。

ところが、プラジュニャーっていうのは、分別知じゃなんです。**無分別智なんです。**分別がない。

**初めから知っている。**初めっていつ？

初めっていうのは、生まれる前って一応たとえ話で言いますけど、人間の向こうから来ること。

人間の分別のことを我々は例えばコンディショニング。

**コンディショニングというのは、物事を分別していくこと。**

**あるいは我々はエゴって言います。エゴって、物事を分別して学んで出来ます。**

**或いはライフスタイルってアドラー心理学では言いますし、**

**或いは仏教語だとカルマって我々は言います。（中略）**

**そういう、マインド、エゴ、じゃないもので、じゃあどこにあるか。**

**私の中にないんだよ。プラジュニャーは私の中にないんです。**

これが「プラジュニャーパラミッタフルダヤ」般若波羅蜜多心経を読み解く、奥のカギ。

私がこの経典を読み解くときに、プラジュニャーが人間の中にない。

**人間には、愛の絶対的不可能性って言っているけど、人間は人を愛することはできない。**

**人間は本当に正直に、誠実に、善人として生きることができない。**

**だから、プラジュニャーは、だから他所からくるんだ。**

**これがまず、あとでだんだん出てきます。**

次にパラーミッタ。パラーミッタ、は普通はですね、パーランとミターにチベット人は区別をしまして、それは「彼岸に至ること」。「向こう岸に至ること」って訳している。これ上品な訳ね。

ある仏教学者が「むきになってやること」って訳した。これすごい良い訳。

**プラジュニャーをムキになって求めること。**

**「ムキになって」というのは、「全てのエゴを棄てて」という意味です。**

**「自分を全否定して」という意味。「完全な改心を経て」という意味です。**

**すべてをゼロにして、ということです。**

**「プラジュニャーパラーミッター」は、私の中にない愛を、ムキになって私を全否定することによって、求める。**

フルダヤ＝ハート。「心」っていうのは、フルダヤっていうサンスクリット語なんですが、これは「ハート」っていう英語とおんなじ語源なんですね。

このお経は英語ではハート・スートラ。スートラって経典という意味です。

Heart・スートラって言われているんだけど、「ハート」って「心」って言葉がたった一か所だけ終わりの方に出てくるんです。

ボーダイサッタ　ハンニャハラミッタコウシンムケイゲ、

「心」は原語はチッタ＝マインドなんですよ。

原文の中には一か所もハートが出てこない、Heart のお経。不思議なお経なんです。

それが、Heart というものの性質なんですね。ハートというものを言葉で直接いうことができないんですよ。言うことができるハートについて言っているんですよ。

だから、ハートという単語が出てこないんですよ。

でもハートのお経なんですよ。（後略）

## ドルズィン・リンポチェによる六波羅蜜ご法話より一部抜粋（2018 年 3 月）

この「六波羅蜜」という教えなのですけれども、「波羅蜜」という言葉は何を意味しているのかといいますと、これは「向こう岸に到る」ということを意味します。
「向こう岸に到る」というのはどういうことかと言いますと、たとえば、河などがありましたら、河のこちら岸から向こう岸に渡るときには、橋か何かを通って向こうに渡らなければいけないのですけれども、そのように「向こう岸に渡る」ということを「波羅蜜」というふうに言います。
我々が仕事か何かを始めたら、最後の究極に到ることが必要なのですけれども、そのことを仏教では「波羅蜜」というふうに言っています。

では、どこに到ることを意味するのかといいますと、まず、我々がいるのはどこかといいますと、輪廻の中にいるのですけれども、輪廻というのは苦しみの中にいるわけです。
ですので、「それらの苦しみから逃れる」ということを意味します。
河を渡るときには橋を渡らなければいけないように、この「六波羅蜜」という教えを実践することによって、輪廻の苦しみから逃れる、そして、仏の境地へと到る、と。そのための「六波羅蜜」という教えです。

（本文）P233-9 行目～18 行目

**智恵(はんにゃ)を具えていないことの過失と具えていることの功徳**
そのうち、第一を説明するなら、
　或る菩薩が施し〔の波羅蜜〕に住することから、静慮〔の波羅蜜〕までを具えていても、智恵(はんにゃ)の完成（般若波羅蜜）を欠いているなら、彼は一切智者の位を得ないのです。
それはなぜかというと、導く人がいない盲人の群集は、意に欲する町に往くことができないのと似ています。

経典『聖摂』による論証

そのようにまた『聖摂』（訳註１）に
「導き手が無い千万の億の生来の盲人たちは、道をもまた知らなくて、都になぜ入ることができるのか。知恵が無いなら、眼の無いこの〔布施などの〕五つの波羅蜜は、導き手が無いので、正覚に触れることができない。」と説かれています。

我々盲人は道をも知らない。導く人、導き手がいないと、意に欲する町、都へ入ることはできない。正覚に触れることができない。導く人、導き手とは…

（本文）p233-19 行目～26 行目

それとは逆に、智恵（はんにゃ）を具えているなら、導く人がいる盲人の群集を町に導くように、施しなど善の集まりすべてを仏陀の道に変えて、一切智者の位を得るのです。

そのようにまた『入中論』〔の第六現前地〕（訳註２）に、「盲人の集まりすべてが容易に、（Ｖ２２９）眼を持った一人の人により、欲する場所に導かれる。」と説かれています。（Ｈ９８ｂ）

『聖摂』（訳註３）にもまた、「智恵（はんにゃ）により法の自性を遍知してから、あらゆる三界を正しく越えることになる。」と説かれています。

遍知…《梵 samyak-sambodhi の音写「三藐三菩提」の訳。または、梵 parijna の訳》
あまねく一切を知りつくした智慧の悟りをいう。

三界…①仏教の世界観で、生死流転する迷いの世界を三つに分類したもの。欲界、色界、無色界の三つ。⑴欲界は淫欲・食欲の二欲を有するものの住む世界で、三界中の最下に属し、地獄・餓鬼などの六道（六趣）があるが、この中の天道は六欲天と呼ばれる。⑵色界は先の二欲を離れてものの住む所で、物質（色）が殊妙な所からこの名がある。欲界の上にあり、四禅天よりなり、細別して十七天を分ける。⑶無色界は物質を超えた精神だけの世界で、四無色定を修めたものの生まれる所である。この天界の最上の非想非々想天を有頂天という。③過去・現在・未来の三世をいう。

| 経　典 | |
|---|---|
| 入中論 | 盲人の集まりすべてが容易に、（Ｖ２２９）眼を持った一人の人により、欲する場所に導かれる。 |
| 聖　摂 | 智恵（はんにゃ）により法の自性を遍知してから、あらゆる三界を正しく越えることになる。 |

今年のリンポチェのご法話を思い出しました。
以下、音声から文字へ起こしたもので、誤字など文責は渡邉です。

2019 年リトリート　ドルズィン・リンポチェによる『五重の道のマハームドラーの前行』御法話より

例えば空性に関しても、例えばいろんな先生から教えを聞いて、頭では理解している人たちもたくさんいるかと思いますが、これを本当に確信をもって理解する、悟る、この空性やマハームドラーの意味、それ

自体をですね、本当に確信をもって悟るには、これは学問的な勉強だけでは悟りを得られず、何が必要かといいますと、ラマの加持。これによって意味を悟ることができます。
ですので、これがラマの加持というものが大事になってくるんですが、
では、このラマの加持というのは、何から自分に与えられるかと言いますと、これは自分からラマに対する、上師に対する一心の信心、信仰心と敬信ですね。熱望を持った敬信。
これを持ってラマに祈祷する、誓願する、祈願する。このことによってのみ、ラマから加持は伝わってきます。
ラマの加持はそこに存在するのですけれど、自分の側から熱望を持っての敬信と、信心、というものがなければ、これは何も伝わってこなくなります。
これは例えていうならば、氷ですね。氷の本性というのは、水ではあるのですけれど、
氷は熱が加わらない限り融けて水になることはないので、
これはこの「熱」を「信心」と例えて、氷の本性である水は、加持とすると、
熱意を持った敬信や信仰心、これを持って氷が融けて、それがラマの加持になり、自分に注がれる。
　もう一つはティーカップにしても、蓋をしていたらそこにいくらお茶を入れようとしてもお茶は入れないのと同じで、その蓋を開けてあげることによって、お茶を入れることができます。
　ですので、このようなことで条件がそろう。自分の敬心。熱意をもった敬信があれば、ラマの加持が伝わってくる、と言えます。

　ここでですね、ラマの加持というものが大切になってくるのですけども。
そこで自分のラマを人間自身、人間そのものだとして、私たちと同じような人間として見るのであらば、そこにあまり加持は入ってこない。存在しなくなってしまいます。
　逆に、ラマを仏として見ることができれば、「仏の加持」というものが、自分に注がれます。
ラマを菩薩として見るならば、「菩薩の加持」というのが自分に注がれます。
　ですので、それはすべて自分がラマをどう見るか、どうとらえるか、ということにかかってきます。
それによって、加持の種類も変わってきます。
ここで、ラマは三宝、もしくは三根本、もしくは仏の三神すべてを体現する存在だと知る必要があります。
ラマは例えば三宝でいいますと、例えばどういう風に体現するかと言いますと、ラマのお身体自身はサンガをあらわしていて、ラマが話す言葉というのは、お釈迦様の言葉、経典をあらわしていまして、ラマの心はブッダそのものである、というふうに捉えると、自分がそういうふうに見れば、ラマの加持というものが、「仏の加持」となって、自分に注がれてきます。
　それらすべて、ここで言うと、それぞれの宗派の相乗系譜のラマたちの特徴や特性、それらすべてが自分の根本ラマに集約されている。すべてを備えていると想像して、それを考えて、その上で一心に、自分が敬信、熱意をもった信仰心を持って、ラマに祈願することによって、自分にその加持が注がれるということになります。
ここで少しでもラマは仏なのだろうか、菩薩なのだろうかという疑念を抱いてしまうと、その加持もそれだけの効果になってしまいます。

ですから、何度も申し上げますが、清浄なる顕われとして見る。
ですので、熱意をもった敬信、信仰心を持って、ラマに祈願する、これが必要になってきます。
これがラマから与えられた口訣。教会などについても同じで、これに疑念を抱かずに、これを清浄のものとして見れると、その加持がそのまま伝わってくる。ということが言えます。
もちろん、ラマの資質を最初から盲目的に信仰するのではなくて、これはもちろん経典にいろいろ書いてありますので、ラマの資質をチェックして調べたあとに、それでも自分にとって仏はこの人だと決められるならば、その時点で自分のこの方が根本ラマとなります。

根本ラマは、我々の導き手です。
私がラマに出会えたのは、アドラー心理学、野田先生のおかげです。
リトリートを企画する文子さん、先輩方も導き手に導く方々です。

**本文 P233-27 行目～32 行目**

**方便の必要性**

　では、智恵(はんにゃ)だけで充分であり、施しなどの諸々の方便はなぜ必要なのかというなら、充分ではないのです。

『菩提道灯論』（訳註４）に「方便を離れた智恵(はんにゃ)と智恵(はんにゃ)を離れた方便もまた繋縛(けいばく)だと説かれているから、よって、両者を捨てるべきではない。」と説かれています。

（英訳）
If that is the case,wisdom awareness alone would be sufficient.
Why do you need all these methods of generosity and so forth?
None are sufficient alone.
The Lamp for the Path to Enlightenment says:
It is said,”Method without wisdom awareness and Wisdom awareness without method are bondage.”
Therefore,do not abandon either.
（試訳）
智恵だけで充分だとします。
では、布施などほか諸々の方便はなぜ必要なのでしょうか？
一つだけでは充分ではないのです。
『菩提道灯論』では、「智恵なしの方便と方便なしの智恵は繋縛です。」

それゆえ、いずれも捨ててはいけません。

**ドルズィン・リンポチェによる六波羅蜜ご法話より一部抜粋（2018 年）**

我々は、仏の境地を得るためにこれらの教えを実践していかなければならないのですけれども、「この中のひとつだけを実践して、他はしない」というのでは、究極的な目的である仏の境地というものは得ることができません。

勿論、ひとつだけを実践するというのでも大きな功徳がありますし利益があるのですけれども、最終的な目標である仏の境地を得るためには、すべてを実践する必要があります。

最終的な目標である仏の境地を得るためには、
智恵だけでなく、方便（布施、戒、忍辱、精進、静慮）もすべて実践

**本文 P234-1 行目～18 行目**

では、方便・智恵を分離して行持〔・実践〕したなら、どこに繋縛するのか、というなら、

菩薩が方便を離れた智恵に依ったなら、声聞の欲するひたすらに寂静である涅槃それに陥って、繋縛されたようになる。無住涅槃を得ることにならないのです。
それもまた、〔究竟〕三乗だと主張する[唯識派の]宗は、永久にそこに繋縛されていると主張するが、〔究竟〕一乗だと主張する[中観派の]宗もまた、〔諸仏により勧められて醒めるまで〕八万四千の大劫にわたってそこに繋縛されていると主張するのです。

智恵を離れた方便に依ったとしても、幼稚な凡夫の地を越えないので、輪廻こそ繋縛されただけになるのです。

経典による論証

そのように『無尽意所問経』（訳註５）（Ｖ２３０）に
「〔殊勝なる〕方便を離れた智恵により〔小乗の〕涅槃に繋縛されるし、智恵を離れた方便により輪廻に繋縛されるので、双運することが必要です。」と説かれています。

経典による論証

『聖無垢称所説経』（訳註６）にもまた、
「諸菩薩の繋縛は何か、
解脱は何かというと、
方便により支えられていない智恵は繋縛です。
方便により支えられている（Ｈ９９ａ）智恵は解脱です。
智恵により支えられていない方便は繋縛です。
智恵により支えられている方便は解脱です。」と説かれています。

行持…行は修行で、修行者としてなすべきこと。持は護持、持続、たもつ、の意。修行を常にやめないこと。修行生活。　（佛教語大辞典より）

涅槃…≪梵 nirvana の音写。≫①すべての煩悩の火がふきけされて、不生不滅の悟りの智慧を完成した境地。迷いや悩みを離れた悟りの境地。解脱。

無住涅槃…生死の迷いの世界にも、また、涅槃の境地にも、それらいずれにも留まらない涅槃の意。仏の智慧のはたらきは生死に住しないから、迷いの世界を離れているが、慈悲のはたらきは衆生を救って止まらないから、涅槃の境界にも留まらない、そのような涅槃。四涅槃の一つ。

（例文仏教語大辞典より）

経典『無尽意所問経』についての訳註５より一部抜粋

（前略）『修習次第Ⅱ』には、

「諸菩薩の道の見と、外道（の道の見）と声聞の道の見もまた別々です。すなわち外道たちの道の見は我などとして顛倒を具えているから、一切の一切において智恵と離れた道です。よって、彼らは解脱を得ません。声聞たちは大悲を離れているので、方便を具えていないのです。よって、彼らはひたむきに涅槃に趣くでしょう。菩薩たちの道は、智恵と方便を具えていると認められている。よって、彼らは無住涅槃を得る。智恵の力により輪廻に転落しないし、方便の力により涅槃に転落しないからです。」といって、『伽耶山頂経』や『聖維摩経』を引用する。

経典『聖無垢称所説経』…The Sutra by Vimalakirti

・ヴィマラキールティ（維摩詰ゆいまきつ）について

ヴィマラキールティは、ヴァイシャーリーという大きな町に住んでいた大金持ちで、まったく在家の俗人にすぎないが、すぐれた空の理解と知恵との持ち主であった。

・『維摩経』Vimalakirti nirdesa sutra は、『般若経』をうけて、より般若経的にその精神を強調したものである。しかも『般若経』のどちらかといえばドライな表現とはちがって、文学的に非常にすぐれた作品であり、全体がひとつのドラマを読む感がある。（中略）さて、このドラマ『維摩経』のテーマは、人の意表をついて、病気である。金もうけや恋愛でもなければ、死についての問題でもない。ヴィマラキールティの人となりは、第二章に最高の賛辞で語られているが、彼は仮病をもって床に臥している。仮病というのは、「衆生がすべて病気なのだから、自分も病気とならざるえない」のである。（後略）

（世界の名著　大乗仏典より）

**世界の名著　大乗仏典 P36 より**

しかしながら、これらの中で知恵（般若）パーラミターは特別の意味を持っている。それは、知恵パーラミターが他のパーラミターの根底にあり、他のパーラミターをなりたたせる要因となるからである。知恵とは単なる判断知や、頭脳的な知識をいうのではない。十パーラミターの最後にあげられる「知波羅蜜多」は、具体的なすぐれた知であるが、般

若の知恵はより内観的な、静寂な、賢者の知であり、判断や分別を越えた無分別智であるといわれている。論理性や合理性のみが知なのではなく、それらを越えて深いところに、直感的に知恵がはたらく。

たとえば、慈善事業は、一種の布施である。しかし、「われこそは慈善者」との意識があり、しかじかの額の金銭を、これこれの貧者に与えた、という執着心がつきまとうならば、真の慈善とはいえないであろう。布施もそれと同じく、我執がつきまとって、布施者を意識し、布施される物や布施される相手を分別するかぎり、たとえ「布施」ではあっても、それは「パーラミター」にはならない。布施が同時にパーラミターであるためには、布施の相手も布施する自己も忘却した、般若の無分別智がはたらいていなければならない。知恵は、布施をして布施パーラミターたらしめるものである。

自利、利他を越えて、共同の課題で行ずる

（本文 P234-19 行目～27 行目）

よって、方便と智恵(はんにゃ)を分離して行持〔・実践〕することは、魔の業を行ずることなのです。

『海龍王所問経』（訳註７）にもまた、「魔の業は二つ一智恵(はんにゃ)を離れた方便と、方便を離れた智恵(はんにゃ)です。＊魔の業だと知ることにより、捨てるべきです。」と説かれています。

　また例えば、意に欲する町に往きたいと欲するものには、道を観察する眼と、地を往く脚との二つが揃うことが必要であるように、無住涅槃の町に往くには、智恵(はんにゃ)の眼と方便の脚との二つが双運することが必要です。

『伽耶山頂経』（訳註８）にもまた「大乗の道＊は要約すると、二つ一〔すなわち〕方便と智恵(はんにゃ)です。」と説かれています。

方便と智恵を分離して行持することは、魔の業を行ずる、と説いています。
方便と智恵を分離して行持することとはどんなことでしょうか。
世俗の日常の中で例えて、
今どこへ向かおうとしているか見定めていない、自分の状態や方向を正しく言葉で語れていない無明の状況のもとで、感情などによって行動することと解釈しました。
疲れたときなど、怒りや不安、怖いや焦り、寂しいなどの感情はやってきます。そのときどこへ向かうのか見定めていないと、視点をぼんやりしていると習慣になっている対処行動をとってしまいます。
「魔の業を行ずる」衝撃の納得する言葉です。
ぼんやりしたことも今までより一つでも多くエピソード分析をし、正しく言葉にしてみよう。